

金田 弘

會津八一の
眼光

春秋社



會津八一の
眼光

金田 弘

春秋社

著者略歴

大正10年(1921)兵庫県龍野市生まれ。詩人。早稲田大学文学部にて
會津八一に師事，東洋美術史を専攻。日本ペンクラブ会員。早稲田
大学美術史学会会員。

〈著書〉

詩集『ナラ』『邪鬼(まがつみ)』等

回想記『旅人つひにかへらず』(筑摩書房 1987年)

現住所 兵庫県揖保郡揖保川町正条3の5

會津八一の眼光

一九九二年十一月三〇日 第一刷発行

©著者 金田 弘
かなだ ひろし

発行者 神田 明

発行所 株式会社 春秋社

東京都千代田区外神田二一八十六

電話 〇三三三五五九六一(営業)

三三五五九六一四(編集)

振替東京 八一二四八六一

図書印刷／寿製本

定価はカバー等に表示しております

ISBN4-393-4412-5

落丁・乱丁本はお取り替えます

目次

序章 會津八一の眼光

古江の柳……………七

秋艸堂学規……………一五

第一章 文学部の襟章

日々新面目あるべし……………一八

かへりみて己を知るべし……………三

第二章 奈良・京都研究旅行

ナ ラ……………三

日吉館に日が暮れて……………四

第三章 一席読み切りにて候

寒山拾得鼻で笑う……………六

虫眼鏡で見たんだよ、おい……………七

第四章 永遠なる感動

深くこの生を愛すべし……………六六
学芸を以て性を養ふべし……………一〇四

第五章 春日野の秋

最後の奈良研究旅行……………二三
看板を撫でながら……………二六

第六章 林下十年夢

古鏡の前に立つ……………二三
みやこべをのがれきたれば……………二六

第七章 「秋艸」と「幻影」

都の西北……………一五
萬葉人の淋しき……………一五

終章 會津八一寓居

御自身の向上が急務だ……………一四

薄暮の別れ	一九〇
-------	-----

東洋美術史講義ノート

東大寺に関する美術史料	一九九
勅額	二〇四
北魏揚銜之著『洛陽伽藍記』	二〇九
東征伝	二一四
校合について	二一五
文献研究の基礎	二三〇
救世観音	二三九
法隆寺の極端金具	二三六
極瓦	二三六
西大寺縁起	二四〇
参考文献	二六四
會津八一略年譜	二六六
あとがき	二六八

カバ―写真
撮影

装釘

長谷川洋子

東大寺戒壇院四天王立像（広目天）
小川光三（飛鳥園）

會津八一の眼光

序章 會津八一の眼光

古江の柳

越後新潟は、私にとって格別の思いのこもる土地である。なぜなら、私が生涯の師と仰ぐ二人の文人が、まことに偶然ながら越後の出身であるからである。

私が生涯の師と仰ぐひとり、日本の現代詩史に巨大な足跡を残した西脇順三郎であり、今ひとり、東洋美術史の研究をきわめた碩学であり、また歌人・書家としても一家をなした秋艸道人こと會津八一である。

片や英国に留学し彼の地の精神風土を身をもって生きようとした洋魂のひと、片や東洋日本の古寺美術に魅せられその魂を求めて生涯を送ったひと。ふたりの師がおよそ正反対の教養と志向を抱いて生きたひとであることは面白いが、そのふたりがともに裏日本・越後の産であるということもまた、温暖な播磨地方に生まれ育った私には、不思議な暗合と思われるならぬ。

平成元年の春のこと、四月一日より一月あまり、新潟市美術館で『西脇順三郎 詩・絵画・その周辺展』が開かれた。

この展覧会のため、姫路の友人と私が所蔵する西脇さんの水墨、油彩、水彩等の絵画数十点が出陳され、その縁もあって私は、前日午後の開場式に招かれたのである。

大阪発の夜行列車で三月三十一日早朝、新潟に着くと、私は午前中、市内の會津八一記念館を訪れた。久しぶりの訪問だ。小柳マサ館長と歓談していると、いきなり、大変な依頼を受けたのである。

六月四日に、瑞光寺で會津先生の歌碑の除幕式を行う、ついてはその式のあと、記念講演をしてもらいたい、というのである。

私は、何か聞き違えたのではないかと、一瞬わが耳を疑ったが、館長の事もなげな誘いに、いとも軽く領いてしまったのである。とは言いながら、これは大変なことになったものだと思省の念も働いて、正式には帰宅後あらためて可否の返事を申し上げることでそこを辞した。

講演の件はともかく、歌碑に選ばれた歌は、先生のふるさと新潟にまことふさわしいものであった。

ふるさとの ふるえの やなぎ はぐれに ゆふべの ふね
の ものかしぐころ

『自註鹿鳴集』に、會津先生はみずから、こう記しておられる。

ふるえ・古江。『萬葉集』第十七卷には「あしがものすだくふるえ」とあり。ここにては越中国の郷名なれども、作者のこの歌にては、ただもの古りたる水辺の意なり。ただ「ふるえ」と「ふるえ」「ふね」と、おのづから口調を成せるは、寧ろ偶然なり。

あの烈しい先生の裡に息づいている、もう一つの、限りなくやさしい心のあらわれた歌である。故郷を懐うこと切なる先生の、愛惜のこもった、しみじみとやさしい一首だ。

今はもう埋め立てられてしまったが、かつてこの町には信濃川から引いた幾筋もの掘割が町を流れていた。それはいつか天然のものと化して静かな町並みに溶けこんでいた。先生の歌は、そのひっそりとした川岸、やわらかな柳の色を、「ゆふべ」の景色のうちに詠みこんでいる。

この歌が記念の碑としてまもなく除幕されるのは、私にもいささか感慨が深かった。この歌碑の建立には、先生を追慕する人々の美しい心がこもっているからだ。

昭和六十三年の秋、十一月二十一日の會津先生の命日に、先生を景慕する「秋艸会」が主催して、瑞光寺で三十三回忌の法要が営まれた。その時に、この歌碑建立の話が持ちあがり、それが今回、具体化されたというのである。

この間の事情を、會津八一記念館学芸顧問である書家の長坂吉和さんが、平成元年六月三日の新潟日報紙上に次のように紹介している。

「幸いに先生の墨跡は北方文化博物館新潟分館で見つかったので、撮影することが出来た。

この筆跡には、『^{いっす}乙酉九月十日、清行庵において秋艸道人、旧製一首を録す』という跋がある。

すなわち、『昭和二十年九月十日に、市内南浜通二番町の伊藤辰治氏宅の茶室清行庵で、昔詠んだ一首をしたためた』と書いてある。ちなみに、この日付は、會津先生が養女キイ子（同年七月十日没）の供養のために瑞光寺を訪れた日であって、その帰路、親しかった伊藤辰治氏のもとで揮毫したものである」

昭和二十年九月といえば、誰もが騒然たる混乱のなかで生と死の狭間を生きていた凄惨な時代であったが、わけても先生には、凍りつくかのような悲しみの日々であった。そのさなかに、このようなやさしい歌を、先生ご自身、思い起こしておられたのである。

私は、これは断ることはできないと思った。播磨に帰ると、正式に小柳館長に承諾の返事を差し上げた。

除幕式の講演のため新潟へ出発する日が近づいた。五月も末に近い三十日の夕方のことだ。新潟県小千谷市の小千谷図書館長の山本清さんから突然電話がかかって来た。

六月三日に小千谷市民会館で行われる平成元年度「西脇順三郎先生を偲ぶ会」総会で、記念講演を私にやって欲しいというのである。

この記念講演は毎年、西脇順三郎の命日、六月五日を期に行われているもので、今年は七回目である。これまでに、新倉俊一、鍵谷幸信、山本健吉、佐藤朔、飯田善国、那珂太郎各氏といった斯界の錚々たる学者、芸術家、詩人が顔を並べている。それに比べると、私などは、藪からふ

と顔を出したような田舎者である。私は即座に、その柄でないこと、その上、翌四日には新潟で大学時代の恩師である會津先生についての講演を行うことになっているので到底受け難いと断ったのである。

しかし、山本館長は、私の断りの弁を飽くまで聞き入れなかった。当日予定していた聖心女子大学名誉教授で国文学者の目崎徳衛氏が、にわかな病氣のために出講不能となり、緊急に対応出来るのは私以外にないというのだった。

たまたま小千谷では、六月二日、三日、四日の三日の間、「永遠の旅人 西脇順三郎 詩・絵画・その周辺展」が開催されることになっていた。四、五月に新潟市で開催されていた同じものが、西脇順三郎の故郷である故を以て小千谷で無料公開されることになっており、山本館長は、私が再度、その観賞のために小千谷を訪れる予定であることを承知の上であったのだ。

ついに私は、西脇順三郎の命日に関わる行事からも逃れられないことを覚り、これまた引き受けるに至ったのである。全くの準備もないまま壇上に立つことになるのであるが、考えてみれば、西脇順三郎、會津八一という二人の偉大なる先達の供養に、日を並べてはんべることになるのであるから、これは私の生涯でも希有なことと言わねばならない。何人も願って叶えられるものではないのだと、あらためて心引き締めるのであった。

四月の新潟行と同様、大阪発の夜行特急列車で、六月三日早朝に長岡へ着き、小千谷へ向かった。

小千谷では、午前中に照専寺を訪ね、西脇順三郎の墓前に参じた。小千谷市民会館での講演は、拙著『旅人つひにかへらず』の書名を、そのまま演題とした。講演をすませたあと、その日のうちに新潟のホテルへ入った。

翌四日、會津先生の菩提寺である瑞光寺へ着くと、先ず私は先生の墓に詣でた。そして、

「かかる卑劣無恥の度し難い徒輩が、はからずも墓前に於て、師について何事かを語らんとするのでありますが、憤怒の極み、どうか墓石の動かぬことを願ひ上げます」

などと、わが身の錆を思うまま吐き出したのであった。「かかる卑劣無恥の度し難い徒輩」とは、かつて先生が私を奈落の淵に追いやった痛恨の言葉である。思わず私の口からついて出たのである。

瑞光寺での私の演題は、何のためらいもなく、「わが師 會津八一の眼光」とした。それは、つねづね私が會津先生を思うとき、『鹿鳴集』の中の一首、

戒壇院をいでて

毘ひる樓博ばくしや叉 まゆね よせ たる まなざし を まなこ に み つ つ

あき の の を ゆく

と詠まれた歌が、私の脳髓を光りのように横切るからである。

毘樓博叉とは、戒壇院四天王の中の広目天の梵名である。先生は、その著『渾斎隨筆』の中で、広目天についてこう述べておられる。

この広目天は、何か肩をひそめて、細目に見つめた眼まなざしの深さに、不思議な力があつて、私はいつも暗いあの戒壇の上に立つて、此の目と睨み合ひながら、ひとりつくづくと身に沁み渡るものを覚える。まことに忘れられぬ目である。やがて此の堂を出て、春日野の方へ足を向けても、やはり私の目の前には此の目がある。何処までもついて離れぬ目である。

また『自註鹿鳴集』には、この歌のところで、

しかるに奈良に住める一部の人々の中には、この像の目つきは、甚だこの歌の作者のそれと似たりと評する者あれど、果して如何。

と記しているが、會津先生にとつてのこの広目天の目つきが、私にとつては會津先生の目がそのまま広目天の目つきとして私から離れないでいるのである。

それほど先生の眼まなこは、広目天に似ていた。眼光炯々として、人をも世をも睥睨し、意気天を衝くかのごとき烈々たる風貌——。

その眼まなこに見据えられたなら、たちまち縮み上がってしまうような、心の底まで見通すかのごとく鋭さ。

先生が世を去ってから、もう三十余年になろうとしている。私が先生に直接教えを受けたのは、わずかに二年、その後の交渉を含めても、薰陶を受けたのは数年の年月である。それにもかかわらず、今日つたない私が在るのは、ひとえに先生のおかげである。先生に出会うことがなかった

ならば、私の人生はどれほどまししいものであったことか。私は先生によって、人生の烈しさを知った。学問の高邁さ、そして真理に向かい精進することの素晴らしさを知った。身を以て先生が示してくださったからである。

そのような先生の情熱を象徴するのが、先生の眼光であった。その射すくめるような眼光こそ、美と真を追求して倦むことを知らぬ先生の生命の力であった。先生に会わなくとも、先生がこの世に存在しておられると感ずるだけで、私は生きる勇気を与えられた。そしてそんな時いつも感じるのが、先生の眼光であった。

あの眼光で先生は私を見ていくのださる。——そう思うことで私は、戦争中から戦後の動乱の時代を生き延びてくることが出来た。先生は一面で稚児のごとくわがままだったが、同時に、不正や怯懦を許さぬ烈しい魂を持っておられた。その魂がそのまま表れたのが、眼光だった。會津八一の眼光こそ、私にとって人生の真理であり美であり正義であった。

私が今、壇上などに立って駄弁を弄したりすれば、その眼光がきらり光って、「貴様、ここで何をやっているのか！」と一喝されるとさえ思われてくるのであった。これ即ち、「會津八一の眼光」と題した所以である。

ところで、私は学生時代に教えを受けたのは、東洋美術史の講義であって、歌集『鹿鳴集』その他の他を以て代表される歌人としてでもなく、現在ますますその紙価を高からしめている書家としてでもなかった。学匠としての文学博士・會津八一以外の何ものでもなかった。だから私は、こ